

もくじ

内藤裕氏の「釉象嵌」陶芸… P1

放水路開削のため引越… P3

明治三陸地震津波の褒賞状… P4

足立史談

第654号

2022年8月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562



写真1 内藤 裕「釉象嵌層文壺」昭和60年(1985)頃 高34.5 径38.5cm
当館蔵(2022年寄贈)

新収蔵資料紹介

ないとうゆたか

内藤裕氏の「釉象嵌」陶芸

小林 優・加藤 ゆずか

卒業後は郷里千葉県や東京の小・中学校で数学や美術の教員として教鞭をとりました。足立

第三師範学校(現・東京学芸大学)に進学し、卒業後は郷里千葉県や東京の小・中学校で数学や美術の教員として教鞭をとりました。足立

は、昭和三年(一九二八)、千葉県の生まれです。やがて東京第三師範学校(現・東京学芸大学)に進学し、卒業後は郷里千葉県や東京の小・中学校で数学や美術の教員として教鞭をとりました。足立

■陶芸家、内藤裕氏 内藤裕氏は、昭和三年(一九二八)、千葉県の生まれです。やがて東京第三師範学校(現・東京学芸大学)に進学し、卒業後は郷里千葉県や東京の小・中学校で数学や美術の教員として教鞭をとりました。足立

今回はこの展覧会の内容を踏まえ、新たに郷土博物館の収蔵資料となった内藤裕氏の「釉象嵌」陶芸作品をご紹介します。

令和四年五月、五十年に渡り足立区を拠点に制作を続けてきた陶芸家、内藤裕(ないとうゆたか、一九二八～)氏より、自身の陶芸作品五点を郷土博物館へご寄贈頂きました。博物館ではこれを記念して「新収蔵資料展「釉象嵌」陶芸の美」(令和四年六月二十八日～七月十日)を開催し、広く寄贈作品のお披露目を行いました。

区に移り住んだのも、東京で教員を務めている昭和三十一年(一九五六)のことでした。

転機が訪れたのは昭和四十六年(一九七一)のことです。この年より裕氏は、二代宮川香山・板谷波山といった近代陶芸の名工に学んだ陶芸家、宮之原謙(みやのほらけん、一八九八～一九七七)に師事し、陶芸の道へ足を踏み入れます。そして、翌年には教職を退いて陶芸に専念することを決め、四十四歳にして陶芸家としての歩みをはじめたのです。

この宮之原謙に師事する中で出会い、裕氏の生涯の表現となるのが、釉薬を用いた象嵌技法「釉象嵌」でした。この技法の詳細については後述しますが、以降、裕氏は「釉象嵌」の技法の探求を続け、陶芸に専念して二年後の昭和四十九年(一九七四)に伝統工芸新作展で初入選したのを皮切りに、三越日本橋本店・大丸東京店などで個展を開催する他、日本伝統工芸展・日本陶芸展などの大規模公募展での入選を重ね、第一線で活躍する陶芸家としての地位を確かなものとしていきました。

平成十二年(二〇〇〇)には伊勢神宮外宮豊受大神宮へ作品を献納するという名誉も得、足立に居を構え、陶芸の道を進みはじめて以来、五十年に渡り陶芸家としての活躍を重ねてきたのです。その作品は現在、敦

井美術館(新潟市)や菊池寛実記念智美術館(東京都港区)といった美術館にも収められています。

■「釉象嵌」という技法 前述の通り、裕氏が生涯の技法とし、探求を重ねたのが釉薬を駆使した「釉象嵌」という技法です。

「象嵌」は、彫金など工芸全般に用いられる技法で、素地となる素材の表面に文様を彫り込んで、そこに素地とは別の素材を嵌め込むことで文様の装飾性を際立たせる技術です。

「釉象嵌」は、これを陶芸の中で用いる手法の一種で、一般に知られる、「陶土」を主体として素地と別配合の陶土を文様彫刻部にはめ込むという象嵌技法に対し、陶磁器の表面にかける「釉薬」を主体とする技法です。その工程は、大きく以下ようになります。

一、形成・素焼き

ろくろで素地となる器を形成し、素焼きを施します。

二、文様の下書きと彫刻

素焼きした磁肌の全体に釉薬を掛け、乾かした上で、下地の釉薬部分に文様を下書きし、文様部分を彫刻刀で削ります。

三、防染と釉薬の象嵌

二で削った文様の縁にゴム液を塗り、嵌め込む釉薬が周囲に染み込むのを防いだ後、素地と別色の釉薬を筆で象嵌(塗り嵌め)

します。釉薬が乾いたらゴム液を剥がし、サンドペーパーでならしていきまます。文様の彫刻から以上までの工程は、必要に応じて複数回繰り返します。

四、焼成(本焼き)

電気窯で本焼きを行い、完成。下地の釉薬と象嵌する釉薬は、焼成時に釉薬が融ける温度「融点」が合うようにあらかじめ調整を行っておきます。

この工程を経て完成された釉象嵌作品は、隣り合う釉薬が文様の形状を崩すことなく絶妙に溶け合い、柔らかな境界線を生み出します。

裕氏はこの「釉象嵌」について、「釉象嵌」に出合ったのは、二十数年前、宮之原先生宅で湯呑みを見せて頂いた時のことでした。初めて知る技法にたいへん興味を持ち、とても心惹かれたことを今でもよく覚えています。その後先生が亡くなられたため、教えを乞うこともできず、自分なりに思考錯誤してこれまで続けて参りました」(『釉象嵌 内藤裕 作陶展』、株式会社三越、一九九七年)と述べています。師のもとで出会った技法を、裕氏は一貫して探求し続けてきたのです。

■裕氏の寄贈作品 今回、裕氏から郷土博物館へのご寄贈

頂いた作品は、「釉象嵌」による陶芸作品五点になります。紙幅の都合上、その全てを紹介することは叶いませんが、ここで二点を紹介します。

写真1に掲載したのは、寄贈五件中、最も古くに制作された作品で、昭和六十年頃の裕氏の作品です。「釉象嵌層文壺」と題されるこの作品は、幾重にも層をなす「く」の字状の文様を壺の表面に散りばめた作品で、一層ごとに文様を彫り、色の異なる釉薬を象嵌するという、釉象嵌の繊細な過程を垣間見せます。

裕氏は、制作の二年前となる昭和五十八年(一九八三)の日本伝統工芸展で、本作のように層をなす、直



写真2 内藤裕「釉象嵌壺『揺』」平成10年(1998)頃 高30.0 径34.0cm 当館蔵(2022年寄贈)

線的な線条文を大皿の見込み(内側)全面に施した「釉象嵌大皿」を展示し、「釉薬の特性が見事にいかされ、直線的な線条文は、陶土による象嵌に較べて軟らかく温い」との評を得て、奨励賞を受賞しました。本作はこの「釉象嵌大皿」の文様のモチーフを活かし、それを四角形に収めて、パッチワークのように散りばめた作品です。

写真2の「釉象嵌壺『揺』」は、平成十年(一九九八)頃の作品ですが、平成十二年に裕氏が伊勢神宮外宮豊受大神宮へ作品を献納した際の献納作品に近い表現の一作です。

曲線を描く葦の葉状の文の中に、様々な色味の円形の文様が配され、さらにそれを覆うように白の斜線が走るといった複雑な文様構造で、平成九年に三越日本橋本店で開催された個展の展覧作にも同様のモチーフが多く見られることから、平成十年前後に裕氏が多く手がけた文様であったと見られます。

裕氏の釉象嵌陶芸作品は、作品そのものの静かなる優美さを樂しむと共に、その工程を知ること、繊細巧緻な技巧をより深く感じることが出来ます。郷土博物館は、今回ご寄贈頂いた作品を、今後とも大切に保管・活用して参ります。

(郷土博物館学芸員・専門員)

放水路開削のため引越

「土もトロッコ」で引越

山崎 尚之

明治四十年（一九〇七）と四十三年の洪水被害が大きかったため、荒川放水路の開削が急がれました。当館にご寄贈いただいた千住の板垣家の資料に、放水路の敷地となる土地の明け渡しや引越の様子が見られる文書がありますので、ここで紹介します（当文章内の引用資料はすべて板垣家資料（当館蔵）です）。

■**土地の売却** 千住川田耕地で農業を営んでいた板垣家は、その多くの土地が開削される放水路の敷地となることになりました。そこで大正二年（一九一三）一月十日に内務省東京土木出張所と「土地買取協議書」を交わして、田畑や宅地を国へ売り渡しました。この時、同時に「移転協議書」も取り交わし、売り渡す敷地にある建物も売り渡しています。買取にあたり、同出張所は、事前に「荒川改修工事土地収用ニ付注意事項」という印刷物を土地所有者に配布して、土地の売渡の際に注意すべき点を列挙しています。

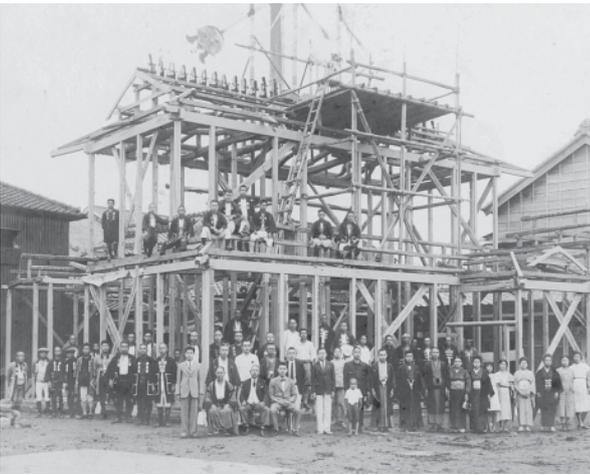
■**放水路の下になる千住** ところで、千住と言っても、現在のように隅田川と荒川に囲われた地域ではなく、荒川

（放水路）開削以前は現在の千住地域から地続きに北は本木や梅田、中央本町辺りまでありましたので、千住は南北に細長い形でした。この頃の住居表示は、千住大橋から五丁目まで以外はだいたい「千住町大字千住〇丁目字〇耕地」というもので、多くを田畑が占めていました（千住緑町地域など萱場「屋根をふく萱を刈り取る場所」もありました）。板垣家のあつた川田耕地は多くが放水路の下になりました。

■**トロッコで土を運ぶ** 同じ年の九月八日に、板垣家から「軽便軌道設置願」が千住町長に提出されています。これは、「拙者、所有地新河川ニテ買取セラレ、住居移転先埋立土ヲ旧所有地ヨリ移転地ニ運搬ノ為、中田道迄往来ニ障碍ナキ様設置仕り度候間」ということで、引越先の土地に盛土をしたい、ついではその土を、旧所有地から軽便軌道（トロッコ）を設置して運びたいと申請したのでした。この申請書には軽便軌道敷設場所の簡単な地図が添付されていて、それからすると、現在の千住新橋と西新井橋の間あたりから南下して、現在の千住公園の北側を東西に走る道（この文書では、この道の中田道と呼んでいます）までの区間に軌道を敷設したいとしています。軌

道の北側終点（土の採取場所）は現在の荒川の真下で、住居表示は「千住五丁目字川田耕地五百六十六番」となっています。

では、土をどこに運んだのでしょうか。この「設置願」には、運び先が記されていません。出頭人（申請者）の住所は「千住町大字千住五丁目四百五十一番地」で、これは土の採取地と隣接するような場所ですので、放水路の開削により住めなくなる場所です。文書に「住居移転先」とあることからすれば、新たに家を建てる場所ということになります。板垣家は、元々は千住五丁目三十五番に住んでおり油屋を営んでいたといえます。採取した土はこの場所の埋立に使われたのかもしれない。



「板垣邸上棟式写真」昭和13年（1938）
当館蔵（板垣家資料）

この申請書とは別に、十二月十九日付で東京府による「軽便軌条敷設ノ件聴届」として軽便軌道の敷設を許可する文書が残されています。こちらの文書で、東京府は「敷設ノ場所ハ千住町大字千住四丁目字西耕地七百七十二番地先中田道ニシテ」と、先の文書の申請区間より約四百メートル東の地点に敷設しています。板垣家は、軽便軌道の敷設を複数区間で申請していたと思われます。文書はありませんが、中田道にも軽便軌道を敷設したのかもしれない。また、この文書には、内務省東京土木出張所荒川改修事務所の「土取許可書」二通が一緒に綴じられています。その住所は、「千住一丁目字川田耕地五二五番宅地 五三七番ノ二宅地」「字川田耕地五六六番畑」となっており、二か所は宅地の土の採取となっています。住居のための埋立には宅地の土のほうがよかったのかもしれない。

■**現在も活用される邸宅** 現在、レストランとして使用されている板垣家の旧宅（千住五六一七）は、北側の都市計画道路の一部開通にもなつて昭和十三年に建築されました。ご寄贈いただいた資料の中にはこの時の上棟式の写真も残されており、多くの関係者が並んだ様子からは自邸新築の晴れがましさが見られます。

（郷土博物館専門員）

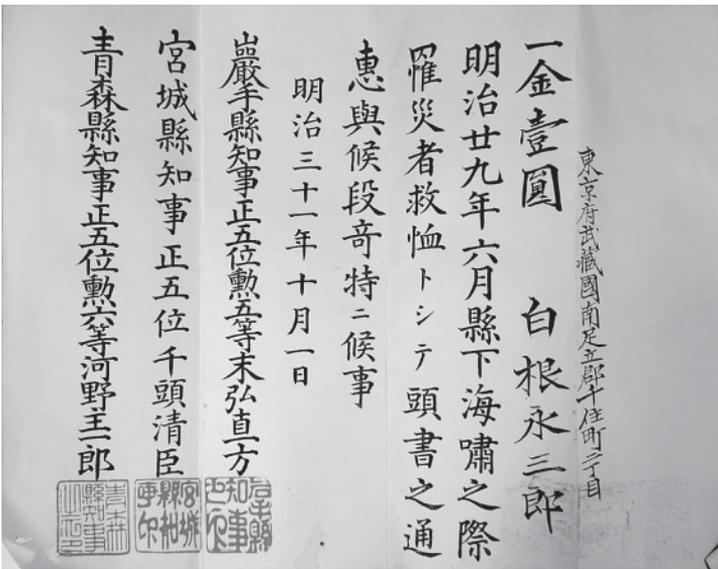


写真 (褒賞状) 明治31年10月1日 白根家文書

したことが記されている。海嘯(かいしよう)は津波のことで、救恤(きゅうじゆつ)は救いめぐむことである。本文書は明治三十一年に被災地の三県知事が寄付に対する謝意を示したものである。

■明治三陸地震津波 明治二十九年六月一日、午後七時三二分、三陸沖を震源とする大地震が起こった。マグニチュードは八・二〜八・五と推定されており、東日本大震災のマグニチュード九・〇に匹敵する大地震であった。

この大地震により、北海道から宮城県までの広い地域で津波が発生した。東日本大震災同様、

三陸沿岸を巨大な津波が襲い、綾里村白浜(現岩手県大船渡市)では約三八メートルの高さに達したという。

この地震と津波により東日本大震災の犠牲者を上回る二一、九一五人もの人々が亡くなった。明治以降に発生した災害の中では、関東大震災に次ぐ犠牲者数である。

■被害総額 地震と津波による被害金額は最大八七〇万円と言われており、当時の国家予算

八、〇〇〇万円の一割強にあたる。参考までに令和四年度の国家予算を見てみると、およそ一〇八兆円であるから、その一割とするとおよそ一兆円となる。単純に計算することはできないが、最大八七〇万円という被害額の多きさは理解できよう。

なお、東日本大震災の被害総額がおよそ一七兆円、阪神淡路大震災がおよそ一〇兆円と言われている。

■義援金 明治三陸地震津波という未曾有の災害に対し、多額の義援金が集まった。正確な金額は不明だが、総額六三五、六六三円に及んだという。こうした義援金によって被災地は支えられていた。

■褒賞状 明治三〇年三月二六日に、国は宮城・岩手・青森の三県知事に対し、金穀財産等を寄付したものに對して褒賞状を送るように通達した。そのため三県知事連署の褒賞状が三三三、二九八件、二県知事の連署や単独で出したものもあわせると合計四一三、三六〇件という膨大な数の褒賞状が発行された。大量に発行された褒賞状は、冒頭の住所、寄付額、氏名のみが手書となっている。本文書と同様の褒賞状は鴨下家文書にも収蔵されており、現足立区域からも多くの義援金を送られていたことが推測される。

■相次ぐ地震 明治三陸地震の五年前、明治二四年にも現岐阜県本巢

市を震源とする濃尾地震が発生し、七、二七三人の死者を出している。この地震では、文明開化の象徴であった煉瓦建造物にも大きな被害があった。明治維新で近代国家となった日本には、相次ぐ巨大地震が立ちほだかっていたのである。

白根永三郎が寄付をして表彰された二五年後、関東大震災が発生し、今度は東京に全国から多額の義援金が集まることになる。

【参考文献】 中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会「1896 明治三陸地震津波 報告書」二〇〇五年 (文化財係学芸員)



【場所】 大田区立郷土博物館(東京都大田区南馬込五丁目一番一三号)
 【展示名】 特別展「大勾玉展―宝萊山古墳、東京都史跡指定70周年―」
 【会期】 八月二日(火曜日)〜一月一六日(日曜日)
 【内容】 全国各地から約一五〇〇点の勾玉を一堂に集めた大展示です。伊興遺跡と法華寺境内遺跡から出土した子持勾玉が展示されます。